

美術科学習指導案

日時：平成24年7月6日 第6校時

学級：1年2組（男子16名，女子15名 計31名）

場所：北舎1階 第二美術室

授業者：仲谷伊世

1 題材名 「MY FRIEND」

2 指導の立場

（1）題材について

題材「MY FRIEND」の学習指導要領との関連

A表現

（1） 感じ取ったことや考えたことなどを基に，絵や彫刻などに表現する活動を通して，発想や構想に関する次の事項を指導する。

ア 対象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ，想像したことなどを基に主題を生み出すこと。

イ 主題などを基に，全体と部分との関係などを考えて創造的な構成を工夫し，心豊かに表現する構想を練ること。

（3） 発想や構想をしたことを基に表現する活動を通して，技能に関する次の事項を指導する。

ア 形や色彩などの表し方を身に付け，意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え，創意工夫して表現すること。

イ 材料や用具の特性などから制作の順序などを考えながら，見通しをもって表現すること。

[共通事項]

（1） 「A表現」及び，「B鑑賞」の指導を通して，次の事項を指導する。

ア 色や色彩，材料，光などの性質や，それらがもたらす感情を理解すること。

イ 形や色彩の特徴などを基に，対象のイメージをとらえること。

これらのことをふまえて，特に見て感じとったことをどのように表現するかを大切にしたいと考え，本時は学習指導要領A表現（3）ア「形や色彩などの表し方を身に付け，意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え，創意工夫して表現すること。」にあるように，友達の表情に込めた表現意図を明確にしながら，表情によって目の表し方が変わることを知り，自分にはどんな表現が良いのか，より願いに迫るよう形を工夫することで表現を深めていくことができるようにさせたい。

私たちは，毎日自分の顔や他人の顔を見ている。またその表情によってその日の体の調子や心の有様などを確かめることもできる。また顔は十人十色と言われるように，その形や姿もみな異なっている。さらに，年齢や人生を重ねることによって少しずつ変化もし，顔は人生の年輪のようだとも例えられている。

現代の中学生は，テレビなどの画面を通じて届く圧倒的な量の映像に囲まれて生活している。映像として伝えられるものには，聴覚を刺激する音や視覚が捉える形や色彩や動きなどの美しさはあっても，においや温もり，手触りを感じることはできない。そうしたバーチャルな体験は，直接見聞きすることのできない世界を知るきっかけを与えるよさがある一方，現実世界のもつ豊かさに対する感覚を鈍磨させかねない怖さを

もっている。

本題材では、自分や人の顔をよく観察し、目や鼻、口や眉毛などの顔独特の特徴を生かし、粘土で形や動きなどの捉え、生命あるものの温もりや手触り、重量感などを感じながら創意工夫させ、制作の見通しをもたせながら、もっとも友達らしい表情を表現させるものである。

ただ単に本物そっくりに表現するだけでなく、粘土でつくる表現の中に生命感が現れるものを目指している。

本題材を通して付けたい力は次のとおりである。

- ・人の顔をよく観てスケッチすることを通して、顔の中には凹凸があり、影ができているところには高さや奥行きがあることが分かり、造形感覚を働かせて、立体で表現する力。
- ・粘土の特性を理解し、道具の効果的な活かし方を考え、自分の意図する形に近づくように粘土の可塑性を生かしながら試行錯誤する力。
- ・常にペアで制作することで、生命あるものの感情によって変わる表情を感じ取る力。

(2) 生徒の実態

1年2組の生徒は、学習課題に対して、周りと協力しながら解決していくことができる。また、毎時の完成された作品の参考資料があると生徒の中では見通しがもて、意見も多く出ることがあった。一人が大きな声を出して発表すれば周りもそれに従って発表ができ、意欲をもつと集団で集中して学習に臨める。しかしその一方、一人で考え、挙手・発言することが弱い生徒が多く、自分の考えに自信をもって発言する姿勢が弱いことは課題である。人の意見に疑問をもっている、言えず、分からないままになっている生徒がいることがあり、意見の言いやすい雰囲気や相談できる場を設けることが必要である。また、大半の生徒は意欲をもち制作に向かっているが、分からないときや、やる気がないときに積極的に制作に向かえない生徒がいる。

今までに美術の授業では、「レタリング」の授業を行った。自分の名前を明朝体で書き、その中に絵文字を加えた。ほとんどの生徒は学んだことを生かし、やりきろうという意思があったが明朝体の特徴は理解していても、それを忠実に再現したり、細部まで見つめたり、こだわりを持って表現している生徒は少なかった。

自分の作品に対するイメージが明確にもてず、自分のこだわりや愛着もないまま制作を進める生徒も少なくない。

そこで、制作途中で願いに合う形を求めさせ、自分のイメージをはっきりもたせていきたい。ペアでの探求を通して、仲間との表現の高まりを認め合いながら、自分の表現に自信をもって制作できる姿を目指したい。

3 研究主題との関わり

(1) 平成24年度 研究主題

学ぶ喜びを実感する生徒の育成

(2) 研究内容

- 1 基礎的・基本的な知識・技能の習得と定着を図る指導計画の作成
- 2 単位時間における指導の工夫
- 3 効果的な学びのための学習形態の工夫

(3) 研究実践

研究内容【2】単位時間における指導の工夫

<具体的な方途>

本時のねらいは「ペアの目を表現する活動を通して、目の構造に気付き、立体的に表現することができる。」である。生徒一人ひとりが確実にねらいに向かえるように指導過程を次のように工夫する。

目の構造に気づかせ、表現する導入のあり方

生徒は、本時の内容に関わって「頭の形」「粘土の扱い方」「道具の使い方」を学習してきている。それらを踏まえて、初めて顔の「部分」の制作を始める。個人の表現の違いをあきらかにして、自分の願いに合った形を作っていかなければならない。生徒の実態から、視覚的な参考作品があると、理解を深められると考える。導入では、本時は立体的な目の作品と平面的な目の作品をみせることで二つを比較することで目の構造に対して理解を深め、一時間の見通しをもたせたいと思う。

まず、前時の学習で、大まかな形はとれており、これから部分に入ることを伝え、目の構造については実際に作り方を見せることで、手順を理解できるようにする。

立体的な目と平面的な目の参考資料を見せる。何が違うかを生徒に問うことで、立体的な方が自然の目だと感じさせる。また、目には目尻や目頭の形や関係、顔全体のバランスも人によって違うことを気づかせ、ペアをよく見て作ることを理解させたい。

目の表情を作る時の実際の道具の使い方や粘土の扱い方を見せて、「簡単に形が変わる」こと「間違えてもすぐに作り直せる」ことなどの粘土の可塑性に気づかせ、試行錯誤しやすいようにする工夫をいれたい。

生徒の一人ひとりのつまずきに応じた指導・援助のあり方

個人追究では次のように指導・援助する。

○まぶたと眼球の違いが出ない生徒に対して

瞼は目にかぶさっているということが分かるように厚みのあるまぶたを作って貼る。

○道具の扱い方がうまくできない生徒に対して

細かい場所は細いヘラを使うことや、薄いヘラを使う、常に綺麗なヘラを使うなど、扱い方や道具の使い分けを指導する。

○顔の中の位置関係や大きさの関係がうまくいかない生徒に対して

ペアをよく観察し、実際に顔のそばに手を持っていき、測らせたり、凹みや出っ張りの具合を色々な角度から見させる。

4 指導目標

- (1) 主題をもち、見通しをもって追究することができる。
- (2) 主題を表現するための形を工夫することができる。
- (3) 立体としての構造的な見方や、量感、バランスを考えて制作できる。
- (4) 立体としての美しさを理解することができる。

5 題材指導計画

時	学習活動	付けたい力	評価・観点	指導・援助
1	・参考資料の鑑賞をする。 ・作品に込める願いを決め文章にする。	・題材との出会いを通して、表現への願いと見通しを明確にする力。	立体作品を制作する意欲がもてる。 【関心・意欲・態度】	・参考資料を用意する。 ・ペアのことを知るための交流プリント。
2	・主題を表現する表情のスケッチをする。	・目や鼻の形を良く観て形と影をスケッチする力。	意欲的にスケッチに取り組むことができたか。 【関心・意欲・態度】	・黒板に大きな顔を描き、実際に線を書き込んでいく。
3	・顔の中の凹凸や影を意識したスケッチをする。	・顔の形を捉えて、形に沿った見えない線をスケッチする力。	スケッチの意図を理解し、立体感のあるスケッチができたか。 【創造的な技能】	形に沿ってない線と沿っている線を比べて、立体感のあるスケッチを理解させる。
4 5 6 7	・手順にそって、骨組みを制作する。	・見通しを持って制作する力。 ・立体として対象をとらえる力。	見通しをもって制作ができたか。 【関心・意欲・態度】 主題に沿った形を関節や骨を意識して骨組づくりができたか。 【創造的な技能】	・制作途中のものを並べる。 ・毎時の課題までのものを見せ、見通しを持たせる。
8	・粘土について理解し、粗付けをする。	・材料の特質の理解する力。	粘土の扱い方が理解でき、実際にできたか。 【創造的な技能】	準備から片付けの流れを理解させる。
9 10 11 12 13 14	・部分と部分、また全体の割合をとらえ、量を意識して粘土付けをする。	・内から出る形を理解する力。 ・対象を立体としてとらえる力。 ・道具を工夫して使う技能。	道具の効果を考えて選択することができたか。 【発想や構想】 割合を意識して、粘土やへらなどを効果的に使うことができたか。 【創造的な技能】	・生徒一人ひとりの制作上の悩みや躓きを拾い上げ指導する。 ・毎時間の課題に沿った、よい作品を全体に紹介する。
15	・ニスで仕上げる。	・作品を仕上げる態度。	効果的な仕上げができたか。 【創造的な技能】	
16	・作品の交流会をする。	・作品のよさを理解する力。	仲間のよさを認め、自分の作品を振り返ることができたか。 【関心・意欲・態度】【鑑賞】	

本時

6 本時のねらい

ペアの目を表現する活動を通して、目の構造に気付き、立体的に表現することができる。

7 本時の展開（１０／１６）

過程	主な学習活動	指導・援助・評価の観点
導入	前時の振り返りをして、本時の課題に繋げる。 ・大まかな全体の形や位置はとれている。 参考資料を見せる。 立体的な目が自然であることがわかる。 目の構造を理解する。 目にはふくらみがある。 眼尻と目がしらの形が人によって違う。 横の比率が縦より長い。	○鼻の高さと目の関係や、顔の中の目の位置関係を正中線を入れながらおさえる。 ○立体感のある目と平面的な目の頭像を出す。 ○一番膨らんでいるところをおさえる。 ○目頭目尻の資料から形をおさえる。 ○目と鼻と顔の距離が人によって違うことをおさえる。
	ペアの目の形を良く観て、立体感のある目をつくろう。 目の作り方を見る。 課題を書く。	
展開	個人の追求 ○立体的な目を制作する。 ○ペアの顔をよく観察し、特徴をつかむ。	○粘土の可塑性を活かしながら、自由に瞼の形を作り出したり、作り直したり出来ることをおさえる
	《予想される生徒のつまずき》 ○まぶたと眼球の違いがない。（線で描いたようになる。） ○立体的な目がうまく表現できない。 ○不自然に目が出ている。 ○目と顔のバランスが悪くなる。 片付け１０分	
まとめ	本時の振り返りを行い、次時への課題をもつ。 授業前と後の作品の変化を見つめ、振り返りカードに自己評価・反省を行う。 振り返りを発表する。	<評価基準> 目を立体としてとらえ、目の構造を理解して表現することができる。 【創造的な技能】